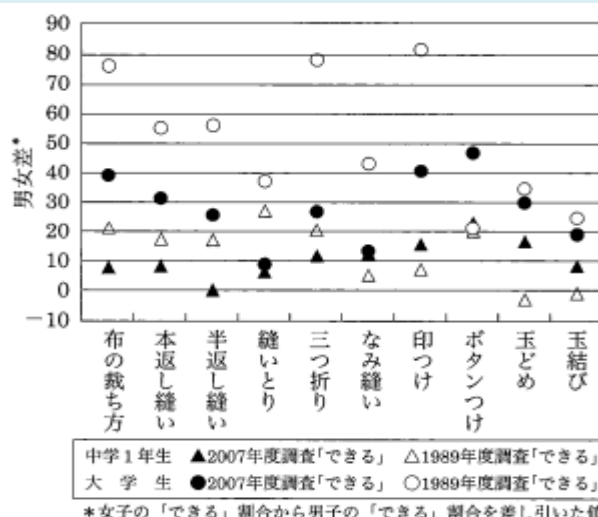


## キーワード

高等学校男女必修、被服製作用語、男子大学生、中学生

結論  
(エビデンス)

被服製作に関連した用語に関する知識と技能の自己評価は、1989年調査と2007年調査を比較すると、中学1年生の男女と大学生女子は概ね低下し、大学生男子は上昇している。男女差は、中学1年では1989年より若干小さくなり、大学生では顕著に縮小した。前回調査から9年間で家庭科の授業時間の減少、日常生活における縫製機会も減少しており、中学生と大学生女子にその影響が出ていると思われる。しかし、大学生男子は、その影響を受けな



がらも、男女共修の学習効果がそれを上回ったと判断できる。

左図は、各項目における女子の「できる」割合から男子の「できる」割合を差し引いた男女差であり、○△は1989年調査、●▲は2007年調査である。大学生調査の○(1989年)と比較して、●(2007年)は顕著に低くなっている。

## 内容説明

本研究は、小学校家庭科の被服製作に関する用語について、中学1年生と大学生を対象に、「知っている」「できる」割合を調査し、高校家庭科男女必修以前の1989年調査と2007年調査を比較し、男女共修による被服製作に関する知識や技能の定着に関する影響について考察している。

(なお、1989年調査の小学6年生は、2007年調査では中学1年生で実施)

## 学校種

小・**中** 高・**大** その他

## 領域・分野

家族・家庭生活 食生活 **衣生活** 住生活  
高齢者福祉 保育 消費生活・環境 その他

## 論文名・題材名等

被服製作に関する知識や技能の定着における高校家庭科男女必修の影響

執筆者・実践者等  
氏名・所属名

日景弥生 弘前大学教育学部  
鳴海多恵子 東京学芸大学教育学部

## 掲載・発表学会誌・報告書・雑誌・書籍等

日本家庭科教育学会誌

巻・号/  
出版社他  
(Op-Op)

Vol. 54-1  
(12-22p)

掲載・実践  
年月日/  
出版年

2011年4月